イヌワシ観察者との連携

自然の豊かさを測る指標「イヌワシ」を共に育て、守る

ひとはくは、県内各地で活動されている個人・団体と連携しています。これらの活動家は、「ひょうごのいきもの・ふるさとを見守るなかま」であり、当館にとって、とても大切なパートナーです。
(https://www.hitohaku.jp/publication/book/hyougoikimono.html)

2020年6月3日午前4時、絶滅危惧種であるイヌワシを53年間も見守り続けている三谷康則氏(日本イヌワシ研究会)から、当館にビックニュースが届きました。但馬のイヌワシが繁殖しているかもしれないとの連絡でした(図1)。この写真をきっかけに、三谷康則氏、今田吉孝氏、伊藤浩士氏、山崎竜氏、およびひとはくでイヌワシ調査チームが結成され、営巣地に向かうことになりました(図2)。そして、5時間半におよぶ踏査の末、2020年6月25日午前10時53分、巣の上に座るイヌワシのヒナ1羽の確認に成功しました(図3)。ヒナの誕生は、県内では16年ぶりの快挙でした。

しかし残念ながら、イヌワシのヒナは巣立ち後1ヶ月で姿を見せなくなり、死亡しました。ノウサギなどの「イヌワシのエサ」が不足していたようです。ヒナの死亡を繰り返さないため、兵庫県は2022年4月に「但馬イヌワシ・エイドプロジェクト」を立ち上げ、イヌワシのエサ(ノウサギ)を増やし、狩場を整備します。また、人工給餌も実施します。

このように、三谷康則氏の活動が16年ぶりのヒナの発見につながり、その後の連携により、イヌワシ保全プロジェクトへと発展したのです。三谷康則氏との連携が、兵庫のイヌワシを守ったといっても過言ではありません。

1.アオダイショウを運搬するイヌワシ(メス)。(撮影:三谷康則氏)巣内のヒナにエサを運搬したと思われた。2.イヌワシ調査チーム。左から、伊藤浩士氏(市民イヌワシ観察者)、三谷康則氏(日本イヌワシ研究会会員)、今田吉孝氏(日本イヌワシ研究会会員)、および布野隆之氏(県立人と自然の博物館研究員)。3.16年ぶりに確認されたイヌワシのヒナ。(撮影:伊藤浩士氏)

地域研究員と連携活動

県下の自然環境に関する情報・ノウハウ・資料を共に蓄積する「なかま」

ひとはくでは、法人・任意団体を問わずひとはくと協働で活動をしたり、館の施設を利用して生涯学習活動を行う場合、「連携活動グループ」に登録して、活動を行うという形があります。連携活動グループは、生涯学習の推進ならびに自然や環境・地域づくりに関わる活動を非営利で展開しています。登録グループは単年度ごとに簡単な活動報告を提出することで、1年の活動の成果を取りまとめることにもなります。また、個人でひとはくと連携して生涯学習にかかわる研究や活動を行う場合、地域研究員に登録する方法があります。

連携活動グループや地域研究員に登録すれば、研究員のアドバイスやサポートを受けられるだけでなく、博物館の施設や備品を利用することができるようになります。また、ひとはくのホームページなどでそれぞれの活動の情報を発信することができます。

ひとはくに蓄積されている多様な知見や情報・ノウハウ・資料などは、研究員だけが集めたのではなく、多様な立場、世代、地域の人びとの活動の賜物なのです。それを支えているのが、連携活動グループ、地域研究員というしくみです。「みんなのひとはく」は「みんなが研究員」だと考えることができます。2022年3月の時点で、連携活動グループ数は15団体(236人)、地域研究員数は56人となっています。

1.希少植物研究会 2.菊炭友の会 3,4.石ころクラブ

他施設のリニューアル支援

専門知識を生かした様々な支援

ひとはくは、専門的なノウハウを持つ県立の拠点館として、これまで、県下のさまざまな施設における展示等の設計、施工、運営を支援してきました。

佐用町昆虫館(佐用町)

廃止となった旧兵庫県昆虫館が佐用町昆虫館として再出発するにあたり、施設と展示のリニューアル、運営に関するアドバイスを行いました。佐用町昆虫館は2009年4月に開館しましたが、同年8月の台風9号水害で被災し休館に。その復興への支援も行いました。

但馬牛博物館(新温泉町)

県立但馬牧場公園内にある但馬牛博物館のリニューアルに向けて、2015年から展示のコンセプトや手法に関するアドバイスを行い、2018年リニューアルオープンしました。2020年には、但馬牛博物館の分館「農業遺産体験館」の開設を支援し、2021年開館しました。

丹波市立氷上回廊水分かれフィールドミュージアム(丹波市)

本州一低い中央分水界に位置する丹波市石生には「水分れ」と呼ばれ、ユニークな地形を基盤とした文化や自然が形成されています。この特徴を生かし、1998年に水分れ資料館が開館。そして2021年3月に展示内容などを刷新しリニューアルオープンしました。計画づくりから展示製作、運用支援において、ひとはく研究員が支援。丁寧な地形や歴史の説明、ユニークな体験型展示、フリースペースを確保し、様々な活動が行われています。コロナ禍にも関わらず、目標だった来館者数3万人を早々と達成し、再開前の10倍以上となり、地域に賑わいをもたらしています。

1.佐用町昆虫館:自然に囲まれた小規模な施設で、昆虫や小動物に触れることができます(2021年5月) 2.3.4.但馬牛博物館:ハンズオン展示を多く取り入れ、明るくなった但馬牛博物館(2018年4月)

県ビジョン、総合計画、環境基本計画、緑の基本計画などの策定支援

よりよい「地域の未来」を形づくる

人と自然に関わる施策の数は、国レベルのものから市町村レベルのものまで多くあります。それぞれの施策では5年から10年、長いものでは30年先を目標に計画をつくり、市民(団体)や民間事業者、公的機関が協働して、より良い社会を実現します。ひとはくでは、このような計画を策定する支援をシンクタンク活動として位置づけ、積極的に取り組んでいます。

各自治体には、施策全体の方向性を示す最上位計画:総合計画があります。兵庫県には総合計画と名が付いたものはありませんが、めざす社会像とその実現のための指針をまとめた「21世紀兵庫長期ビジョン」や、「兵庫県地域創生戦略」がこれに相当します。各市町にも総合計画や地域振興計画があり、市民の生活に関わる幅広い分野の専門家が集まり、策定支援を行っています。これらの最上位計画にも、計画づくりの専門家としてひとはく研究員が参画しています。

また、専門分野にわかれた施策の計画もあります。人と自然に関わるものとしては、環境基本計画、緑の基本計画、景観計画、都市計画(区域)マスタープランなど法律、条例に基づいて策定される計画や、生物多様性戦略、レッドデータブックの改訂、公園整備計画、地域づくり計画など施策を実現するための個別計画があります。近年は、民間事業者に公的施設の整備や管理運営を任せる制度もあり、その事業者を選考することも計画策定に近い重要な役目です。これら個別計画には、ひとはくの各研究部が、専門性を活かして策定支援を行っています。

1.兵庫県環境基本計画 2.芦屋市緑の基本計画「まちなかの緑」

主な参画審議会・委員会

世界自然保護基金日本委員会(WWF ジャパン)/環境省ヒアリ有識者会議/兵庫県長期ビジョン審議会/兵庫県環境審議会/兵庫県都市計画審議会/三田市総合計画審議会/神戸市公園緑地審議会/三田市環境審議会/加古川市環境審議会/姫路市景観・広告物審議会/宝塚市教育環境審議会/三田市文化財保護審議会/兵庫県地域創生戦略会議企画委員会/神戸版レッドデータブック検討委員会/神戸市生物多様性神戸プラン推進委員会/宝塚市緑の基本計画策定委員会など